

急ぎ過ぎだよ 人類は。

ゆるやかなネットワークを目指す

ITより  
逢いてエ

# 雑報 文

いろんな考えがあるから面白い  
いろんな人がいるから楽しい

No. 702

2025年 月

編集・発行 鈴木厚正

〒266-0005 千葉市緑区菅田町2-21-359

T&F 043-291-2917

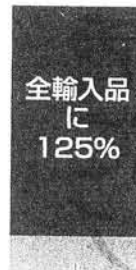
も・く・じ

- 隠岐の島旅行 2
- 年齢別在留外国人の推移 4
- 菫の節供 7
- 「星がみとつほいとの祈り」他 8
- お便りから 12
- け・い・じ・ば・ん 13
- 山仕事(4月、薄場) 21
- 映画「アプレンティス」 26

(掲載枚は13Pに)

米中の関税・報復の応酬

(写真はロイター)



全輸入品に20%追加

相互関税

3月までの  
追加関税



農産物などには  
最大15%追加

まるでガキのケンカですね。

(4月12日 東京新聞)

メル配信をご希望の方は、

<suzukikosei.san@gmail.com>へ。

三宅伊都子さんが

応対していただきます。

(「カレンダー」と大きく違ったので、号数表示だけにします。)

題 字 故 佐村隆英和尚 (千葉県長柄町本光寺住職)  
カ ッ ト 故 泉ゆきをさん (にっぽん箱絵の会会長)

印刷機 リソグラフ RZ 330

※この号の切手は、EXPO 2025。  
(不持賛成じゃないけれど)

## 山仕事(4月、薄場)

桜三昧、素敵なお三日間だった。

しかし、4月初めの雨には参った。アンナさんと小石川植物園を計画したが、予定の2日、3日とも雨。残る6日も12時以降に雨マークがあり、アンナさんと相談して改めて奥施と決めた。だが、ほとんどの連絡不徹底で佐藤真敏、田中紀代江のお二人にカラ足を踏ませることになり、落ち込んだ。その後も、13日に予定した土井さんと山梨の上条集落行きも、天候が荒れるとの予報で延期することにした。その度に連絡をし、上記不徹底もあり、疲れた。

4月8日(火) 晴。ほんた駅前のお桜は、まだしっかり残っている。そこで、今日は桜と富士を眺めながら行くことにした。桜はよかったが、富士はうすぽんやり。

敷地駅で久米、若林さんに迎えられる。いったん正士さんちに行き、チェーンなど道具類を積み込むことにする。

竹中さんと、ノ本あとの列車で来た原田さんは、チェーンの目立てなどメンテナンス。その他のメンバーはワラビとり。2番芽だったが、けっこう採れた。

この日は作業をせず、「あらたまの湯」に入った後、森町薄場の久米さん宅へ。

(夕) タケノコの木の芽和え、ワケギの酢味噌和え、刺身(中とろ、カンパチ、太刀魚)。

切干し大根の煮物、サバのショウガ焼、シタケ、きゅうちゃん漬、大根のハリハリ漬けにスパゲティ。

タケノコは竹中さん、シタケと野菜類は久米さんの畑と竹中さんの提供。そして内田美智子さんから、川越の「蔵」最中をいただいた。ありがとうございます。

4月9日(水) 晴。時折、桜吹雪。手作り味噌の汁。

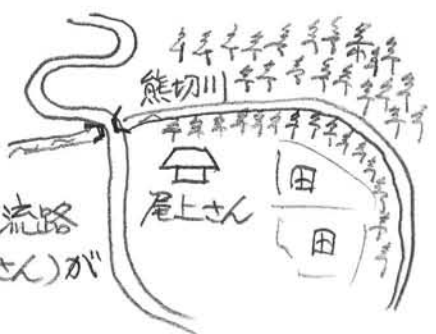
食後、康江さんがカレンダーの裏を使って「祝雑報綴文700号」の貼り紙づくり。どうやら、ほとんどの知らないところで話が進んでいるようだ。

朝食後、春野町の尾上さん宅へ。三倉(みくら)川、気田(けだ)川、熊切川と清流沿いの美しい道を行く。

前方に、サクラや花モモに囲まれたお宅が見えると、鼻の奥がツンとなった。出迎えた尾上美智子さん、目が潤んでいる。

庭から眺め、川べりで眺め、橋を渡って高みに登り、さまざまな角度から「桜の園」を眺める。

この桜の園、30年余り前、熊切川左岸(右図の上部)の土砂崩れが発端だ。田んぼを埋め、流路を変えた土砂崩れの跡に「お父さん」(夫君静春さん)が



字が波打つのは、下敷の野線がよく見えぬから。かすんで小さくなるのは眠気がさしたから。

数十本の桜の苗を植えた。自動車工場の経営が忙しく手の廻らない「お父さん」。ぼくが草刈りの手伝いをするようになった。

当時はぼく一人。背丈を越すカヤに埋もれた苗を誤って刈らぬよう、笹を立てた先端に白いポリ袋が結びつけられていた。当初は草刈り機はなく、柄の長い明善鎌だけだった。全面を刈るなど思いも寄らず、苗木のまわりだけを刈った。

その後、佐藤貞敏さんが加わり、やがて人が増え、草刈り機も整備され、作業がはかどるようになった。時には、離れた五和(と言ったかな)のスギ林の掃除刈りをしたり、シタケのコマ打ちを手伝うこともあった。尾上さんにはすっかりお世話になる、楽しい作業だった。木が大きくなってからは足が遠くなったが、いまでも地形や大きな石の所在など思い浮かんでくる。

時折、ウグイスの声をききながらあずまやでお茶をいただき、採り立ての野菜をいただき、お嬢さんとお二人に見送られ、旧天竜市二俣へ。

着いたところは、料理店「天竜膳三好」。丁度、水産(みさくば)から昔乙女4名も到着したところだった。ぼくの知らぬ間に、700号を祝う席が用意されていた。

スミさんの司会で始まり、原田さんが挨拶と乾盃の音頭。壁には康江さん手作りの貼り紙が。そして、尾上さんから贈られた真紅のバラ数十本の花束が手渡された。思いがけぬことに、またまた感動。

皆さんから、ふと言ずつ。

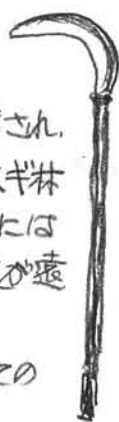
康江さん) もう40年も前からの付き合い。さっきは「もう飽きた」と言ったけど、永い間ありがとう。私も時々投稿しているが、あまり同じ人ばかりです。もう少しいろんな人に書いてほしい。

原田さん) 静岡へ来るようになったのは、関東農政局と一緒にいた頃から読んでいた雑報で、大木を倒した記事を読んで凄いなと思ったから。

大木は、丑のりさんの機械小屋の脇に生えていたスギの木。道路に近く、枝が電線に触れるため、伐った。

ぼくが木に登って道路側の枝を切り落とし、正士さんが森林組合から借りたバー/ム(チェーンソー)を使い、ぼくが正士さんの庭のオニチリホールでまきながら伐った。今も切り株が残っている。

山崎さん) 佐藤貞敏さんと天城越えをした時、「こんな面白いのがあるよ」と見せられて参加。ACAP(エイキャップ:消費者関連専門家会議)の「環境問題を考える」グループで、正士さんの所へ行くようになった。



雑誌の企画でサイの神などあちこち出かけたとき、厚正さんが「なんでこんなよい所に皆さん来ないんだらう」と言っていた。

雑誌は、毎月国立国会図書館に納本しているので、一度行って見てください。立派に装丁されていますよ。

ネットワークもすごく、魅力的。鈴木秀人さんに「あとは山ちゃんやれよ」と言われたが、絶対ダメ。

若林さん）正士さんが理事をしている「元氣里山」のボランティア活動のとき、佐藤さん達が居て、すごい人たちとびっくりした。人間のスケールが広がるような気がして、参加するようになった。尾上さんもすごい。

猫の手を途絶えさせてはと、久米さん竹中さんに協力してもらった。よろしく頼みます。

宍屋さん）私の文ものせてくれるけれど、博学の人が多くて。

（「水窪の暮らしを書いて下さい」と、康江さん）

「代表的日本人」と書いてくれたけれど、気持ちだけは縄文に近づけるよう生きていきたい。

こういう人たちに巡り会えるとは思っていなかった。せむし1000号まで。

中谷さん）初めて会ったのは、津谷寛奈さんのところ。このような生き方はできないし、仲々手伝いもできなくて。大沢（下記参照）、斑尾高原での出会いで皆さんとも知り合え、本当にありがたい。

1年くらい永く生きられれば、奉仕の生き方をしていきたい。

熊谷さん）旅行記、主人と楽しみに読んでいます。「徘徊老人だね」と言いながら。

竹中礼子さん）じいさんに「面白い人たちいるよ」と言っている。水窪には絶対に居ない人たち。ケーナを吹いて昔の歌をうたう。

何ぞ大沢の賞吉さんのところに行っているのか。（4名の住んでいるところから山東側の斜面にある大沢集落。お茶の連作を出版している飯田長彦さんに誘われて行きました。別所賞吉・ナカエさん夫妻の隣りに、津谷寛奈さんが家を借りて住んでいました。何年か斜面の草刈りの手伝いをしたけれど、賞吉さんが亡くなって中止）

だんだん行こうと、寛奈さんとは遠縁で、ナカエさんの弟さんが私の姉の旦那に……と分かってきた。貴重な人たちに会えて楽しい。

竹中亮三郎さん）若林さんの紹介で「昔ながらの食をつくる会」の仲間。

変った人がいるよと紹介されて猫の手に参加し、びっくり。

いつの間にか毎回参加するようになった。水窪からのおいしいご馳走もあり、今後とも永く、とりあえず800号を。





縄文には いろんな意見があって 楽しい。

(「また、ハスを見に行きます」と、舟屋さん)、7月頃です。

久米さん) 私がトリだそうです。

700号は通過点だろうが、皆さん大騒ぎするのでこういう席になった。猫の手もそうだが、内容はちゃんと上の世代の情報。いろんな人たちの私見がのっていて、すごいと思う。テレビのコメンテーターより濃いご意見と思う。

今回気づいたこと。「無料にします。ただし、年に一度はお便りを」に、沢山の人々からお便りが。それぞれにコメントしているのがすごい。一寸違う価値のものと感じる。

正士さんもバックナンバーをずーっととってある。発行しているものに対して、熱い感情を抱いていることを感じる。

正士さんの「地域を美しく」に打たれて、夢見たことを実行されているという人々。「地域を美しく、楽しく、明るくいところにする」、本当はそれを望んでいるのではと感じている。

正士さんはいつか亡くなるかもしれないけれど、その意(遺)志は後に引き継がれていく。そのひとつの役目として 雑報縄文がある。無理をしないで続けてほしい。

—— 聞き違い、もれがあると思いますが、ご容赦 ——

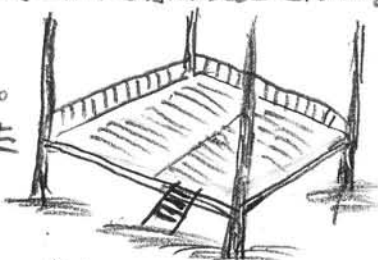


(正士さんがきちんとファイルしてくれたバックナンバーは、水窪の皆さんが引き取ってくれることになりました。正士さんから4月11日夜、電話があり「2階にも何冊があるので忘れずに」とのこと。)

赤飯をいただいて水窪の皆さんと別れ、薄場へ。

この日の作業は、以前、木タシの観賞で上がったことのある、川バリの棧敷(デッキ?)の撤去。ぼくの大好きな「ぶっ壊し」だ。「〇〇党ぶっ壊す」とか「〇〇〇〇をぶっ壊す」という人があるが、こちらはそんな大それた「ぶっ壊し」ではない。

右のように、4本のスギの木の間に、2間四方、8畳間ほどの広さ、高さは背丈近くに造られている。竹中さんが中じとなり、久米さんも釘打ちを手伝ったそうだ。8分(24mm)ほどの板は腐敗が進み、上にのるのははばかられる。



4隅のスギには丸太が添えられ、上の板を支えている。ボルトで固定された杖をはずすと、ガタンと下がってくる。下がった端から、大きなバールととびロを使って、垂木(たるき)から板をひきはがす。板についた釘を、山崎さんが抜いていく。

順調に進み、残り半分となった板を下から支えている束(つか)をチェーンソーで切っていると、突っかい棒をしていたのに垂木が腐っていて、ぼくの頭を直撃した。幸い、重さがさほどでなく、落下距離も小さかったので今のところ何ともないが、突っかい棒をもう1本入れておくべきだった。

17時、終了。「あらたまの湯」から戻ると、青山忠義さんから鍋一杯のシタケの煮物が届いていた。「椎茸、急いで作りました。味はわかりません、食べてください」のメモが添えてあった。ご馳走さま。

(夕)糸こんにゃくの明太和え、タラの芽と玉ネギの肉巻、ワラビのお浸し、厚揚げと菜花の煮浸し、タケノコの土佐煮、赤飯と椎茸煮。

すばらしい一日だった。今年、365日の中で最高の日となろう。

4月10日(木)、晴。若林さんは竹細工指導のため、早朝5時に出発。

朝食後、昨日取り壊した廃材のうち使いそうな板をハス田のあせ道に敷く。昨年のハス田は2倍に拡大していた。小型トラクタを入れたら泥に沈み、竹中さんが、鉄で開墾したそうだ。昔、藤澤七郎(故人)とやったが、大変だったさよう。

昼、うどんなどを頂き、久米さんに遠州森取まで送ってもらい、帰宅。竹中さんは、正士さんちへ道具返却。充実した三日間だった。

◇ 700号 おめでとうございます。700号のメール配信は59名です。

さて、3月25日に正士さんにお会いし、ホームページについてお話を伺いました。正士さんは整理を進めておられ、その中で猫の手クラブや雑報縄文に関連する点として、以下の2点が挙りました。

1. 「大平(おいたい)の今」のホームページ内、山仕事レポートでの「雑報縄文 山仕事」の掲載は、猫の手クラブがこの地の山仕事を続ける限り継続したい。また、可能であれば写真を数枚でもアルバムとして掲載したい。
2. 雑報縄文のバックナンバーのストックがあるが、どなたか引き継いでいただけないだろうか。

正士さんの強いご希望と感じましたので、その場で「雑報縄文 山仕事」のホームページ掲載は続けるとお返事しました。

三宅伊都子さん(神奈川県・平塚市)

(ありがとうございました。ばくめさも、どうかお願い)  
(い致します。バックナンバーは、水窪の直さんが。)



ねこのて

安東明子さん